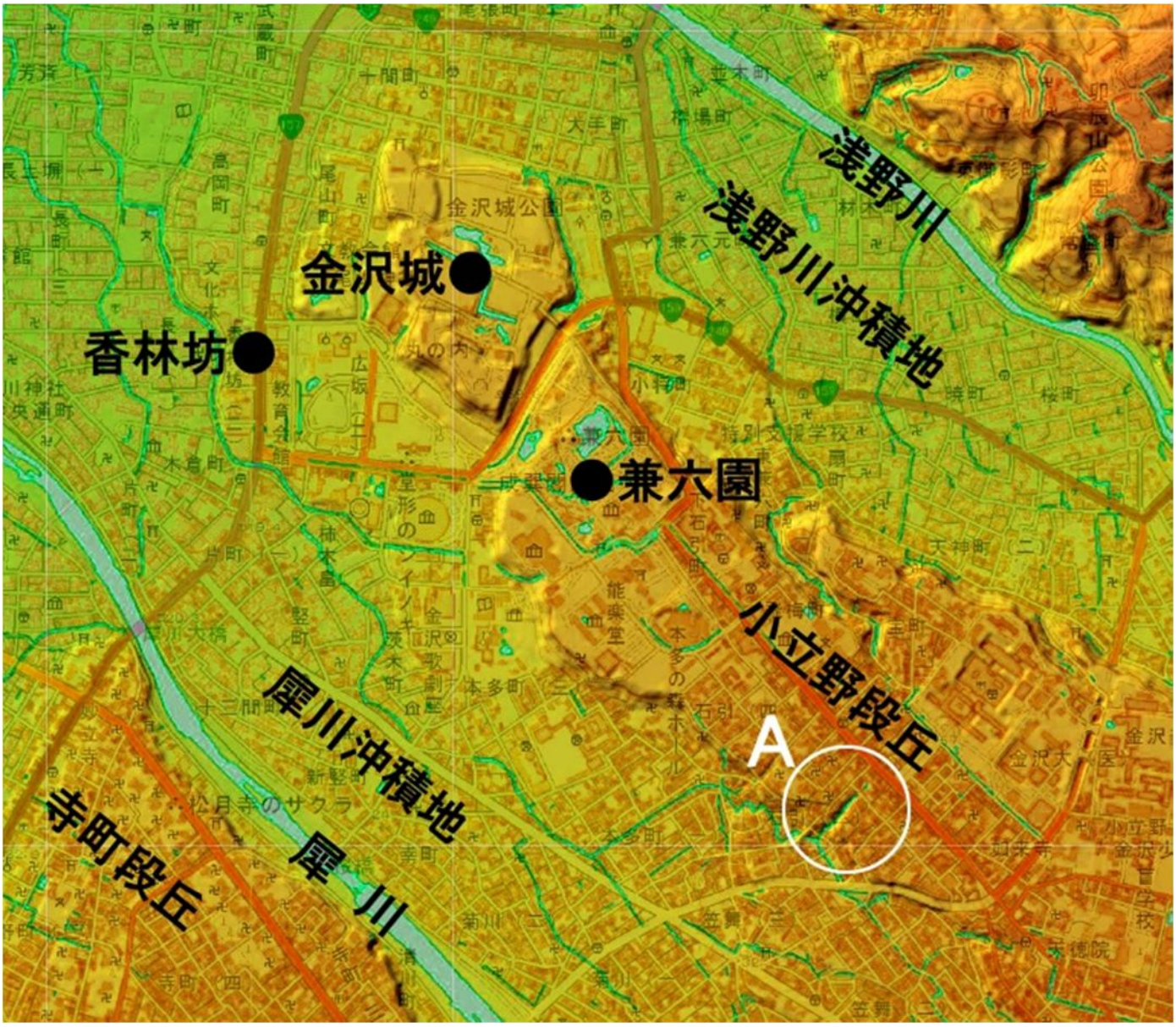
「日々の理科」（第 501 号）　2015（H27),11,18

「金沢の地形（２）」

お茶の水女子大学附属小学校　田中　千尋

金沢といえば、兼六園と金沢城である。両者はともに、小立野段丘（台地）の北西端に位置している。小立野段丘は、浅野川沖積地（低地）と、犀川沖積地の間にある、細長い台地である。金沢城より西側には、台地も丘陵もなく、城跡からは現在の金沢駅方面市街地が一望できる。段丘と低地の境目の自然の崖（段丘崖）があるのも、築城の場所としては理想的だった。金沢城と兼六園の境にある谷間は、築城当時に造られた人工的な切通しで、現在は国道が通っている。この地形は東京でいえば、四谷・麹町台地の東端に建てられた、江戸城（現在の皇居）によく似ている。

私が気になったのは、小立野段丘に切り込んだ、細い谷間である。よく見ると、この段丘には、小さな谷間がたくさんある。これは、犀川や浅野川の小さな支流がつくった浸食谷で、神田川の支流が浸食した、茗荷谷駅のある谷間と同じ地形である。特に、地図のＡの谷間は鋭く切れ込み、非常に興味深い。

今回の金沢出張では時間がなく、天気も悪かったので、かの兼六園すら行けなかった。この切れ込んだ段丘崖を見に行かなかったのが、大変残念である。しかし、わざわざ金沢に行かなくても、観察する方法がないわけでもない。明日は、このＡの地点に、地形の観察に出かけてみたいと思う。

（下）「兼六園付近の色別標高図」作図；C. Tanaka